

## 南 紀 伊 (渡辺 教官)

1966年10月11日—14日

紀伊半島を鳥羽から和歌山へ、海岸沿いに旅した。中心的に観察したのは、志摩半島の鳥羽を中心としての断層崖及びリアス式海岸、潮ノ岬を中心とする海蝕崖、紀伊宮原を中心とするミカン栽培である。

これらを順序にそって、簡単に記すと。

鳥羽の近くの賢島から船にのり、その付近の観察が始まった。賢島はもとより、この島々は明らかに海岸段丘をなして、上部に礫層がある。そして、何段にもなっているのであるが、それが、構造盆地状(すりばち状)に沈降して、あの有名なリアス式海岸を呈している訳である。この段丘上の平らな面は耕地化され、昔から、半農半漁の生活が営まれていた。10Cのはじめ、66の国があった時、志摩はもう1つの国を呈しており、畿内に水産物(くんせい、干かれい)を供給する事により、発達していった。そして、次第に專業化し、commercializeされた生活へ変化し、あわび等の国際商品を生み出し、海草からとる肥料を農業へ提供している。また、ここは、周知の如く真珠王国であり、養殖を行っているのは日本全国4千軒中千軒を占めており、とくに戦後、著しい発展を遂げている。中国やミシシッピーでとれるベタズメガイが、その母体となる訳だが、貝の卵巣内に真珠のもとになる核と一緒にガイトウ膜を切って入れると、そのガイトウ膜の作用で、核のまわりに、真珠層が形成される訳である。

大体直径10mmになるのに5年位かかり、宝石に値するのは10%にしか満たないという事である。

次の日、鳥羽を出発、紀伊勝浦のノリ作り、尾鷲の漁港、製材所、又、このあたりよりポツポツみられる山を開拓したミカン畑、又は水田転換したミカン畑等を、車窓観察しながら、串本へと向かった。串本は紀伊半島と尖角岬である潮ノ岬を結ぶ陸繋沙州(トンボロ)上にある町である。その日のうちに、潮ノ岬を歩く。大島が陸の方は違いが、海側だけが海岸段丘面であるのに対し、潮ノ岬は、岬全体が80m、60m、40m位の3、4段の海岸段丘であり、上部の堆積の厚さは、約1m位である。

この段丘は坂道を平坦化してしまっているので、見た目には全く分らないが、ハンドレベルで測るとこうした段位が分かる。

さて、岬を歩きながら、半農半漁で少し、漁業に重点が、かかっている生活状態、移民村、土地利用(さつまいも、大根、さといも等の栽培)それから、強風に対する防備としての石置き屋根、高い石垣、高い木のへい等を観察した。

さて、その翌日、いよいよ最後の目的地である紀伊宮原へ向った。生憎、この日は天候が悪く、車窓観察の条件はあまり良くなかったが、それでも和深、江佳のあたりで、海岸段丘、富田で bay head delta それに段々畑にびっしりと植わっているミカン等を、ながめながら、紀伊宮原に到着。

この農協で、この宮原地区におけるミカン栽培の実態について、話を聞く。

それによると、現在、ミカン栽培のうち、約30%ほどが、水田転換したものであるが、日本においては、かつて水田を他の商品作物の畑に変える事は、ほとんどなかったそうである。これは、米作に対する愛情というか、執着というものから来るのであろう。しかし経済がそうした emotion に勝った訳である。ここは、土地の傾斜が急で、見ただけでも、あのような急傾斜地での栽培の苦勞が思われた。収穫されたミカンは、ケーブルで下ろされるそうである。現在の一番の問題は、土壌が古く、水の便が悪いため、かん水が必要な事である。かん水をする時、ミカンの甘味が、ずっと増すのだそうで、スプリンクラーなどが工夫されている。

さて、有田川沿いのミカン栽培については、卒論などで詳しく考察されているので、ここでは、ごく簡単にした。

これで、巡検が終了した訳だが、この度の巡検は3泊4日で、紀伊半島の海岸線をぐるっとまわるという強行軍だったため、どうしても観察が散漫になってしまった。

しかし、ある地域を総合的にながめるといふ目的は、この巡検の後に行った徽音祭の発表のための総括の結果、少しは、達せられたのではないかと思う。 (3学年 森山・鳥居)

## 鳥取から高松へ (正井教官)

昭和42年3月13日~15日

13日の午前10時、鳥取駅に集合。鳥取大学の豊島先生の御案内で、鳥取砂丘(浜坂砂丘)へ向った。戦前は鳥取連隊の演習地であったこと、戦後は市と鳥取大とで折半し自然状態での保存に努めていることが原因で、よく保存されている鳥取砂丘は、面積的には必ずしも大きくないが、起伏が大で複雑な形態をしている。砂は予想に反して黄色(長石による)だったが、手にとってみると、白色(石英)、黒色(角閃石)の粒も混じっている。この砂の平均粒径は0.3~0.4mmで、風速毎秒5m以上になると、その3乗の量の砂が運搬される。ここには風下斜面の傾斜30~35°、風上斜面の傾斜15°内外をもつ砂丘が2列並んでいる。第1列は、新たに海岸前面に堆積し成長した新鮮な白灰色の砂から、第2列は、第1列よりも黄色く古砂丘を風触し再堆積した砂から成り、